

一人称叙述形式と「新しい人間」の発見

——国木田独歩「春の鳥」と田榮澤「白痴か天才か」——

一、新しい文学の「見本」としての独歩文学

一九一九年二月、東京の青山学院大学神学部に在学中の田榮澤（一八九九～一九六五）は、留学仲間である金東仁や朱耀翰、金煥らとともに韓国最初の純文芸同人雑誌『創造』（一九一九年二月～一九二一年八月）を東京で創刊した。韓国近代文学史を塗り替える画期的な同人誌が外国、しかも日本で刊行されたという事実には韓国近代文学の「起源」を感じずにはいられないが、田榮澤はこの同人誌に処女作「惠善の死」を発表し、文学者としてのスタートを切ったのである。以後「白痴か天才か」（二号）、「運命」（三号）、「生命の春」（五、六、七号）、「毒藥を飲む女」（八号）、「Kとその母の死」（九号）などの小説を次々と発表し、本格的に小説家としての道を歩むことになるが、後年田榮澤は小説を執筆するようになった経緯を次のように語っている。

恋愛小説ではない、ちよつと変わった小説が書いてみたくなって書いたのが「白痴か天才か」である。白痴のように見えながらも発明の才能を持つ「七星」という少年が自分の存在を認めない村を抜け出して自由な世界へ旅立とうとするが、凍死するというストーリーの短編である。當時は小説といえば恋愛をテーマにしたものしか書かれなかったもので、こういうものも小説だという見本を示したかった^①。（拙訳）

丁 貴連

田榮澤が『創造』の同人となつて一連の作品を書き続けたのは、恋愛や情事など興味本位の小説が幅を利かせていた当時の韓国文壇に対して、新しい文学の見本を示すためであつたことがこの文章からわかる。新しい文学とは、一九一〇年代当時、日本文壇で一世を風靡していた自然主義や写実主義、リアリズムなどといった、いわゆる事実をありのままに描き出す文学であることはいうまでもない。当時日本に留学中だった田榮澤ら創造派の同人達は、自分達の周りのごくありふれた人々を取り上げ、彼らの人生や現実を決して理想化するのではなく、ありのままに描き出す全く新しい文学作品に接し、衝撃を受ける。そして、相変わらず男女の恋愛ばかりを興味本位に描き続ける韓国文壇に危機感を覚えずにはいられなかった。そうした不安から、韓国近代文学史上最初の同人雑誌を日本で創刊し、文学運動を始めることになったのである。

ただ、当時日本に留学していた田榮澤らは、まだ若くてリアリズムや自然主義などといった文学上の主義や理念を理解するには至らず^②、自分たちの力で新しい文学を打ち立てることはできなかった。そこで彼等は日頃から読んでいた日本文学や日本語に訳された西洋文学の中に見本となるものを捜し求めた。そして出会ったのが、簡潔な文体と豊富なモチーフ、それに「一人称小説の開祖」と言われるほど一人称形式を多用していた独歩の短編小説だったのである。独歩の小説は一九一〇年代当時、韓国や中国など東アジアから日本に来ていた留学生達が関心を示し、読んでいた日本の文学作品の中の一

つであつた。日本に渡つてきた留学生達が、すでに文壇で著名だった夏目漱石や森鴎外、そして当時一世を風靡していた自然主義作家の作品ではなく、独歩の作品を読んでいたという事実は⁽³⁾、独歩の作品の中には新しい文学を目指して勉強中の作家達が学ぶべきものが多くあつたということの意味している。田榮澤もその中の一人であつた。彼が数多い日本の近代小説の中で、とりわけ独歩の作品に新しい文学の見本を見出したのは決して偶然だとは思えない。その最初の作品が「春の鳥」(一九〇三)である。

「春の鳥」は、ある田舎の学校に赴任してきた教師である△私▽が、そこで出会った一人の「白痴」の少年との交流を回想する作品である。つまりこの作品は、教師の△私▽が見た子供の物語である。よく知られているように、父祖への絶対的な服従と礼儀が徳目とされていた「孝の国」朝鮮では、子供は大人のために存在する玩具に過ぎず、子供の存在を強調することは長らくタブーとされてきた⁽⁴⁾。こうした儒教的児童観は近代になつてもすたれることなく、子供は儒教的ヒエラルキーの末端として様々な社会的差別にさらされていた。だからこそ、白痴の子供を小説の主人公にし、彼らを保護することを訴える独歩の作品に、田榮澤は驚きを禁じえなかつた。と同時に、依然として儒教的児童観の下にいる韓国の子供たちに篤い思いを寄せざるを得なかつた。そうした思いが彼に「春の鳥」を翻案させたのである⁽⁵⁾。ただ田榮澤は、独歩のように無垢な少年の自然への回帰を描くのではなく、白痴のように見える少年が自分を認めない村に絶望し、自由な世界へ旅立とうとして凍死するという、きわめて現実的な世界に描き直している。当時の韓国の現実がおのずと彼に子供の置かれた現状への関心を促す作品を書かせたのであろう。こうして田榮澤は韓国近代文学史上はじめて子供の存在を顕在化させたわけであるが、それを可能にしたのは、彼が留学以来読んでいた独歩の一連の一人称小説である。

独歩は、△私▽や△僕▽、あるいは△自分▽という一人称の語りによる小説を多く執筆しているばかりでなく、物語体、書簡体、日記体、告白体、談話体、回想体、演説体、手記など様々な形式を試みている。そのために小山内薫からは「第一人称小説の開祖⁽⁶⁾」とも評されたが、これは何も独歩が生

み出したわけではなく、二葉亭四迷が訳したツルゲーネフの作品から学んだものである。それを独歩が日本の文壇に定着させたことはよく知られた事実である⁽⁷⁾。実は独歩の多用したこの一人称による語りの形式は、国境を越えて韓国の近代リアリズム小説の成立にまで影響を及ぼしている。例えば、韓国における最初の近代書簡体小説⁽⁸⁾「幼き友へ」(『青春』一九一七)、一人称観察者叙述形式小説⁽⁹⁾「白痴か天才か」(『創造』一九一九)、枠組小説⁽¹⁰⁾「ペタラギ」(『創造』一九二二)は、いずれも独歩の「おとづれ」(二八九〇)、「春の鳥」(一九〇四)、「女難」(一九〇三)と「運命論者」(一九〇三)の影響を受けている。これは韓国近代文学の「起源」を考える上で非常に重要な問題である。言い換えれば、独歩の一人称小説は韓国の文壇に書くことの自在さを獲得させたわけであるが、中でも一人称観察者叙述形式は、それまで韓国社会が見落としてきた人々、すなわち子供や愚者、女性、貧民などを発見し、社会的弱者への関心を促したという点において注目⁽¹¹⁾な形式である。

一人称観察者叙述形式とは、△私▽という語り手が体験したこと、見たことと、聞いたことを告白するという意味においては一人称小説であるが、この△私▽が語る物語は、自分のことではなく、他者の事件や経験、人生⁽¹²⁾である。つまり、△私▽はあくまでも第三者の立場に立つて他者の人生を観察し、それを語る形式である。これは、それまでの韓国文学にはまったく存在しなかつた新しい叙述方法である。それが田榮澤の「白痴か天才か」の出現によって注目されるようになり、以後、一九二〇年代には同じ形式の作品が主要なものだけでも十二遍も書かれる⁽¹³⁾など、この形式は社会の現実を写し取る新しい叙述様式として多くの作家から注目されたが、そのきっかけを作ったのはほかでもない、独歩の「春の鳥」である。

そこで本稿では、独歩の「春の鳥」を軸に、韓国の近代文学史に登場した一人称形式の中でもとりわけ観察者叙述形式に注目し、これが韓国に受容された背景と、韓国文壇にもたらした影響について考察を行いたい。

二、「春の鳥」と「白痴か天才か」

李在銃氏はその著『韓国短編小説研究』（一九七二年）の中で一九二〇年代の韓国の短編小説の特色の一つとして「傍観者の証人、または観察者としての一人称」をあげ、田榮澤の「白痴か天才か」（一九一九）をその先駆的な作品であるとしている⁽²⁾。さらに、氏は「白痴か天才か」は韓国近代文学史上初めて「愚者」を扱った文学作品であり、『白痴か天才か』は一人の人間の二元性に着目したという点において見逃せない作品⁽³⁾であると高く評価している⁽⁴⁾。つまり氏によれば、「白痴か天才か」という作品は形式においても内容的にも近代韓国文学史上重要な役割を果たした作品である。にもかかわらず、一九六三年、金松峴氏が田榮澤の「白痴か天才か」は国木田独歩の「春の鳥」の影響を受けた、ほとんど翻案に近い作品であると指摘して以来、独歩作品の翻案だという事実ばかりが先行し、作品そのものに対するきちんとした評価は未だに行われていないのが現状である⁽⁵⁾。しかし、「白痴か天才か」は、それまで韓国文学では用いられなかった一人称観察者叙述形式を用いたという点において、また当時誰も関心を示さなかった子供と、子供を氣遣う教師とのふれあいを通じて、韓国の近代文学史上初めて子供の存在を顕在化したという点においても注目に値する作品である⁽⁶⁾。以下、両作品を比較しつつ、「白痴か天才か」が執筆された過程に迫りたい。

「白痴か天才か」は全四章の作品だ。第一章では、ある田舎の小学校に赴任してきた教師と一人の少年との出会いが描かれ、第二章では、少年との交流が深まるに連れて少年が障害を持つことがわかり、また母親から少年の教育を依頼される。第三章では、少年への白痴教育は失敗するが、少年の隠れた素質を発見し、第四章では、少年が突然、事故死するという構成になっている。一方「春の鳥」も全四章のうち、第一章は、ある田舎の学校に赴任してきた教師が一人の少年に出会う場面から始まる。第二章では、少年との交流を深めていくに連れて少年が障害を負っていることがわかり、また母親から少年の教育を頼まれる。第三章では、少年への白痴教育は失敗するが、彼の意外な面を発見し、第四章では、少年が突然、事故死するという構

成になっている。これだけでも両作品の影響関係は充分見て取れるが、まず第一章から詳しく見ていくことにする。

「白痴か天才か」では、ありとあらゆる職業を経験してきた八私Vがわけあつてある山村の学校に赴任してきた経緯を次のように語っている。

私は大人になる前から様々な仕事に就きました。小さい頃は学校に通い、官吏になったこともあります。キリスト教徒になって伝道活動も行いました。ある時は会社で就職してサラリーマンにもなりました。ある時は友達と「女郎屋」にも通いました。どん底に落ちた時などは飴売りや客引きにも手を出しました。教師もしました。電車の車掌もやりました。また日本留学生になったこともあります。田舎に行って農民にもなりました。それから一時は熱烈な愛国者になったこともあります。ある時などは汽車の石炭運びもしました。そしてどういふわけか私は三度目の小学校教師をするようになりました。（中略）

得英学校は中和郡で勢力の強い朴氏一族が住んでいる村が建てた学校です。教室は以前寺子屋に使われていた瓦屋根の建物を使っていますが、村の裏山の麓に高くそびえているのでどこからもすぐ目に付きました⁽⁷⁾。（拙訳以下同、一二頁）

一方「春の鳥」も、八私Vが教員として赴任した町、とりわけ城山の情景描写から始まっている。

今より六七年前、私は或地方に英語と数学の教師を為て居たことが御座います。其町に城山といふのがあつて大木暗く繁つた山で、余り高くはないが甚だ風景に富で居ましたゆゑ私は散歩がてら何時も此山に登りました。

頂上には城跡が残つて居ます。高い石垣に蔦葛からみ付いて其れが真紅に染まつて居る按排など得も言はれぬ趣でした。昔は天守閣の建て居た処が平地になつて、何時しか姫小松疎に生ひ立ち夏草隙間なく茂り、

見るからに昔を偲ばす哀れな様となつて居ます。

私は草を敷いて身を横たへ、数百年斧を入れたことのない鬱たる森林の上を見越しに近郊の田園を望んで楽しんだことも幾度であるか解りませんでした。⁽⁸⁾ (三九三頁)

両作品とも、まず最初に△私▽という一人称の語り手が現われ、自分の経験や感想を告白するところから物語が始まっている。しかし、やがて△私▽の物語の中に一人の見知らぬ少年が加わる。「白痴か天才か」では、赴任してきた翌日、裏山に散歩に出かけ、一人の少年に出会うくだりを次のように描いている。

翌日の午後、私は暗い部屋の中にいるのが嫌で独りで裏山に登りました。秋空がまるで静かな湖の如く澄んでいて、沈みかけている夕日の光は遠くの山、近くの村を紅色に染め上げました。私は頂上まで登って下界を見下ろしました。(中略)

私の足もとで「先生」という声が聞こえました。私がびつくりして下を見ると、どこかで見かけたような子供が、息を切らしながら、私を見していました。(中略)「飯食えつて！」という言葉に私は笑いをこらえられませんでした。その子供が朴教頭の家の息子だということはすぐに見当がつかしました。私は「うん、行こう」と言いながら、「名前はなんと言うの?」と聞きました。「七星」。これが彼の返事でした。そこで私は「じゃあ、朴七星か」とまた聞きました。彼はこつくりと一度うなずくと、また、口をぽかんと開けて私を見ていました。私はぴんと来るものがあつて、それ以上は聞かず、彼の手を取ってゆつくりと村に向かつて下りていきました。下りてゆきながら、「年はいくつかね?」と聞くと、急に顔つきがおかしくなつて、返事をしないので、もう一度聞きましました。すると、唇をびくびくさせてからやつと口を開け、「うん、十三になったんだ。」と声を張り上げました。私は続けて優しく聞きました。「きみ、学校に行つてゐるの?」「うん」「何年生なの?」これには返事も

せず、へへと笑うと、私の手を振りほらい、突然大きい声を出して「学徒よ、学徒よ、青年学徒よ」と歌いながら、どンドン走つていったかと思つと、姿が見えなくなりました。(二四頁)

「春の鳥」でも、散歩がてらにいつも登る城山で△私▽が一人の見知らぬ少年に出会う場面を次のように描いている。

或日曜の午後と覚えています、時は秋の末で大空は水の如く澄んでいながら野分吹きすさんで城山の林は激しく鳴つていました。私は例の如く頂上に登つて、やや西に傾いた日影の遠村近郊を明く染めているのを見ながら、持つて来た書籍を読んでいますと、(中略)

『先生。何を為て居るの?』と私を呼びかけましたので私も一寸驚きました。が、(中略)『書籍を読んで居るのだよ。此処へ来ませんでした。』と言ふや、児童はイキなり石垣に手をかけて猿のやうに登りはじめました。(中略)『名前は何と呼ぶの?』と私は問ひました。『六』『六?』『六さん』といふのかね。』と問ひますと、児童は点頭いたまふ例の怪しい笑いを洩して口を少し開けたまふ私の顔を気味の悪いほど熟視て居るのです。『何歳かね、歳は?』と私が問ひますと、怪訝な顔を為て居ますから、今一度問返しました。すると妙な口つきをして唇を動かして居ましたが急に両手を開いて指を屈つて一、二、三と読んで十、十一と飛ばし、顔をあげて真面目に『十一だ。』といふ様子は漸と五歳位の児の、やうく数を覚えたのと少しも変わらないのです。そこで私も思はず『能く知つて居ますね。』『母上さんに教わつたのだ。』『学校へゆきますか。』『往かない。』『何故往かないの?』

児童は頭を傾げて向を見て居ますから考へて居るのだと私は思つて待つて居ました。すると突然児童はワア〜と唾のやうな声を出して駆け出しました。『六さん六さん』と驚いて呼止めますと

『烏々』と叫びながら後も振りむかないで天主台を駆下りて忽ち其姿を隠くしてしまひました。(二九四〜三九五頁)

△私△は、突然登場してきた少年に言葉をかけられ、しばらく彼と言葉を交わす。ところが、少年がいきなり奇声を出して△私△の前から姿を消したために、物語は再び△私△の視点に戻ることになる。

第二章に入り、再び少年に会った△私△は、その尋常でない様子に興味をそえられる。「白痴か天才か」では、下宿先の教頭の家で再び少年に会った△私△は、

翌日の朝、部屋でご飯を食べていると、昨夜私を呼びに来た七星が私に会えたのが嬉しいのか、ニコニコ笑いながら部屋の敷居のところにあたっていました。私もつい嬉しくなつて、

『七星ちゃん、ご飯は』と声をかけましたが、七星は答えもせず、ただ笑いながら立っているのでした。

私が七星についてあれこれと見たり聞いたりしているうちに、七星の身の上が次第にわかってきました。(二五頁)

というように、少年の異様な様子に気づき彼を観察し始める。「春の鳥」でも全く同じ描写がある。

処で驚いたのは田口に移つた日の翌日、朝早く起きて散歩に出ようとすると城山で逢つた児童が庭を掃いて居たことです。私は、

『六さん、お早う』と声をかけましたが、児童は私の顔を見てニヤリ笑つたまま草箒で落葉を掃き、言葉を出しませんでした。

日の経つ中に此怪しい児童の身の上が次第に解つて来ました、と言ふのは畢竟私が氣を付けて見たり聞いたりしたからでしやう。(三九六頁)

つまりどちらの作品でも△私△は、朝、下宿先で再会した少年の様子が気になり、彼をあれこれと観察する。そして、「白痴か天才か」では、七星は生まれつきの白痴で、その原因は彼の家が代々の大酒飲みで父親の女遊びも

関係があるという事実を△私△は知る。だから息子の将来を案じた母親から七星の教育を頼まれると、

『先生』

『はい』と私は丁重に答えました。夫人は続いて

『ちよつと言いくいのですが』と、少し間を置いてから言い出した。

『あの子一人を頼つて生きてゐるのに、いくら言つても勉強はせず、いたずらばかりしています。勉強をしようとしても先生の言うことがさっぱり分からないようです。先生達もしまいには腹を立てて諦めてしまします。あれをどうすればよいのでしょうか』と、両目に涙を溜め、咽ぶ声で『先生に何とかしてあの子を教えていただき、人間として生きていけるようにしていただけま』と最後まで言葉を続けられませんでした。私もついもらい泣きをしながら座っていました。『ええ、心配しないで下さい。どんなことがあつても私が何とかして教えて見せますよ』と答えました。(二六頁)

△私△は快く七星の教育を引き受けてしまうのである。一方「春の鳥」でも△私△は六歳の叔父から六歳が生まれながらの白痴で、その姉も母親も白痴だったこと、姉弟の父親が大酒飲みだったということを聞かされる。△私△は少年の白痴の原因は遺伝的なものと環境によるものだと断定する。そして、六歳の母親から息子の教育を依頼されると、

『先生、お寝ですか』と言ひながら私の室に入つて来たのは六歳の母親です。(中略)

『そろそろ寝やかと思つてゐる処です』と私が言ふ中、婦人は火鉢の傍に座つて

『先生私は少しお願いがあるのですが。』と言つて言ひ出しにくい様子。『何ですか。』『六歳のことで御座います。あのやうな馬鹿ですから将来のことも案じられて、それを思ふ私は自分の馬鹿を棚に上げて、六歳の

ことが気にかかつてならないので御座います。』

『御尤もです。けれどもそうお案じになさるほどのことも有りますまい。』とツイ私も慰めの文句を言ふのは矢張人情でしやう。(三九八頁)

白痴教育の難しさを知りながらも、△私▽はその依頼を引き受けるのである。

第三章では、少年と深く交流するようになった△私▽が、少年の母親や叔父達が知らないもう一人の少年を発見する。「白痴か天才か」では、白痴と思われていた七星が実は好奇心の強い子供、だということに△私▽が気づく。そして、ある日美しい声で唱歌を歌う七星の姿を目撃したことで、その思いは確実なものになる。

午後、子供たちを帰した後、少し本を読んでから村に降りていつて七星を探しました。しかし、七星はもういませんでした。それで、一人で村の外れに出かけました。そこは小さな小川が流れているところで、古い柳の木が一本立っていました。

晩秋の夕暮れでありました。空は澄んでいて、鳥の声一つ聞こえず、周囲が静かで、誰かが優しい声で唱歌を歌っているのが聞こえてきました。その声は私が十七歳の時滞在していた平壤のサラン村で聞いたことのある、若い女学生たちの賛美歌のようでした。それこそ玉を転がすような歌声でした。驚きました。まさかその声の主が七星だなんて。七星の歌声があんなに美しいとは知りませんでした。

空の色、夕日の光、澄んだ川の水、古い柳の木、そこに少年、灯籠、まさに絵です。少年はまさに天使です。

私はそっと柳の木の下へ行ってみました。七星は砂浜に腰をゆったりと下ろし、飛んでいく雁の群れを眺めながら一人で歌を歌っていました。私の目にはどうしても七星が白痴のように見えませんでした。(二八頁)

一方「春の鳥」では、六歳の知能の程度が予想していたより遙かに悪いと知った△私▽は六歳の教育を諦めてしまう。そんなある日、△私▽は六歳が非常に腕白で、山登りが得意なばかりでなく、俗歌も歌えるという新たな事実を知るのである。

或日私は一人で城山に登りました、六歳を伴れてと思いましたが、姿が見えなかつたのです。冬ながら九州は暖国ゆえ天気さへ佳ければ極く暖かで、空気は澄んで居るし、山のぼりには却て冬が可いのです。

落葉を踏んで頂に達し例の天主台の下までゆくと、寂々として満山声なき中に、何者か優しい声で歌うのが聞こえます、見ると天主台の石垣の角に六歳が馬乗に跨つて、両足をふらふら動かしながら、眼を遠く放つて俗歌を歌つて居るのでした。

空の色、日の光、古い城跡、そして少年、まるで絵です。少年は天使です。此時私の目には六歳が白痴とはどういふ見えませんでした。白痴と天使、何といふ哀れな対照でしやう。しかし私は此時、白痴ながらも少年はやはり自然の児であるかと、つくづく感じました。(四二〇頁)

このように△私▽は、少年を教育したり散歩に連れて行ったりしながら少年を間近で観察することによって、少年の意外な面を発見し、少年への理解をさらに深めていく。

最後の第四章では、少年が突然事故死するが、△私▽はそれが単純な事故死だとは思えない。「白痴か天才か」では、ある日七星がいなくなり、村中が大騒ぎになる。その場面描写は次のように描かれている。

そうこうしているうちに冬になり、雪が降るようになりました。

私はある日の夕方、読んでいた本が面白くなかつたので、少し遅れて朴教頭の家に行きました。行くと、七星が朝からいないといって、村中が大騒ぎになっていました。それで私は朴教頭の下男を一人連れて、彼

の母親と一緒に提灯をもって小川の方へ出かけてみました。母親は居ても立ってもいられず涙を流しながら、

「七星ちゃん、七星ちゃん」と叫びました。(中略)

翌日の午後になって七星は見つかりました。見つかることは見つかりましたが、何もしゃべらない、冷たい七星でした。(二九頁)

この場面に対応する「春の鳥」のそれは、三月末のある日、朝から姿の見えない六蔵を心配して田口の家の方が探し回り、八私Ⅴも、田口の下男一人を連れて、城山へ探しに出かけるくだりである。

彼はこれするうちに翌年の春になり、六蔵の身の上に不慮の災難が起りました。三月の末で御座いました、或日朝から六蔵の姿が見えませんが、昼過になつても帰りません、遂に日暮になつても帰つて来ませんから田口の家では非常に心配し、殊に母親は居ても起ても居られん様子です。

其処で私は先づ城山を探すが可らうと、田口の僕を一人連れて、提灯の用意をして、心に怪しい痛しい想を懐きながら平常の慣れた径を登つて城跡に達しました。

俗に虫が知らすといふやうな心持で天主台の下に来て、「六さん！六さん！」と叫びました。(中略)

天主台の上に出て、石垣の端から下をのぞいて行く中に北の最も高い角の真下に六蔵の死骸が落ちて居るのを発見しました。(四〇一〜二頁)

両作品ともに搜索の甲斐もなく、少年は遺体で見つかる。「白痴か天才か」では、強い好奇心と旺盛な探求力を持っているが故に村人にじゃま者扱いされていた七星が、自分の探求心を満足させてくれるもっと広い世界を求めて家を飛び出す。が、結局平壤に向かう途中の道端で凍死した姿で発見される。一方、「春の鳥」では、鳥が大好きな六蔵が、鳥のように飛ぶつもりで城山の石垣から落ちて死んだらしく、石垣の下で発見される。ところが、どちら

の作品でも語り手である八私Ⅴは、少年は死んでむしろ幸福だったのではないだろうかと思うのである。「白痴か天才か」の八私Ⅴは七星の冷たい遺体を前にして

哀れな七星は今頃、邪魔するお母さんも、殴る叔父や先生も、そしてからかう友たちもいないところ―あの―雲の上、星の上に登つて思い切りしたいことをしながら自由に暮らしているのではないだろうか。(三十頁)

と、少年は周囲のあらゆる束縛から逃れて自由の世界へと旅だったのではないだろうかと考えようとする。「春の鳥」で、六蔵の死に対する八私Ⅴの考えはほぼ同じ軌跡をたどっている。

『何だつてお前は鳥の真似なんぞ為た、え、何だつて石垣から飛んだの？……だつて先生がそう言つたよ、六さんは空を飛ぶ積りで天主台の上から飛んだのだつて。いくら白痴でも鳥の真似をする人がおりますかね』と言つて少し考へて『けれどもね、お前は死んだほうが可いよ。死んだほうが幸福だよ……』

私に気がつくや

『ね、先生。六は死んだほうが幸福で御座いますよ。』と言つて涙をハラ／＼とこぼしました。(四〇三頁)

六蔵が石垣から飛び降りて死んだのは、好きな鳥に変身して永遠に空を飛び回ったかったのだ。そう解釈することで八私Ⅴはあまりにも痛ましい少年の魂を慰めようとする。つまり、両作品の八私Ⅴにとって少年の死は、徹すぎる現実からの脱出と映っているのである。

以上、四章を順に見てきたが、その結論として「白痴か天才か」は「春の鳥」の深い影響下に執筆された、ほとんど翻案に近い作品であるといつてよいであろう。興味本位の恋愛小説が幅を利かせている文壇に対して「こうい

うものも小説だ」という見本を示すために執筆した「白痴か天才か」が、実は独歩の作品の翻案だったという事実、田榮澤の近代韓国文学者としての苦悩を感じずにはいられない。

しかしながら、田榮澤は「白痴」と「少年」を結び付けて無垢なイメージにつながる子供を描きながらも、「白痴」の少年に「発明の才能」を与えることによって独歩作品からの変容を試みている。ではなぜ田榮澤はこのような変容を行なったのだろうか。それを知る手がかりとして東アジア文化圏における近代的な児童観形成が指摘できよう。

三、儒教批判と児童論の台頭

「白痴か天才か」は、ある山村の小学校に赴任してきた教師である△私▽が、一人の「白痴」の少年に出会い、白痴であるが故に村人に疎外されて死んでしまった少年の身の上を語った作品である。つまりこの作品は、△私▽が見た子供、すなわち他者の物語である。

韓国の文壇では一九二〇年代後半になると、男女の恋愛を題材にした小説や啓蒙小説は影を潜め、自分たちの周りの他者、とりわけ社会的に虐げられていた女や子供、貧しい人たちの日常生活や体験を観察し、それを語る小説が流行する¹⁰⁾。これは一九二〇年代以降、韓国社会が抱えていた社会的経済的問題と深い関連がある。

よく知られているように、韓国や中国、日本など儒教文化圏では長い間女と子供は社会の末端に位置づけられ、虐げられてきた。とりわけ子供は独立した人格が認められず、大人の玩具に過ぎない状態が長く続いた。このような考えは近代に入り、西欧から新しい児童観が伝えられるようになって次第に解消されてはいた。だが、儒教式倫理教育がはびこる韓国や中国では、子供は依然として大人の玩具に過ぎなかった。一九二〇年代の韓国の雑誌をひもとくと、子供への暴力と暴言をやめようという意見が目立つ¹¹⁾。

この他にも殴る大人たちが無数にいて、寺子屋に行けば先生と校長が、

家に帰れば父母兄弟が順番に待っている。子供を見れば叱り、会えば殴るの。たとえ金石でも傷つかないはずがなく、鋼鉄でさえ耐えられるはずがないだろう。「子供は三日殴らないと狐になる」という諺までも出たくらいだ。しかも、このような現状を誰一人救うとする者がいない。嗚呼！子供がかわいそうだ、憐れだ、これは果たして人の罪なのか、それとも神様の罪なのだろうか¹²⁾。

こうした現状に当時の知識人、金小春は、「長幼の序の弊害——幼年男女の開放を提唱す」(『開闢』第二号、一九二〇年七月)という評論の中で、「我々朝鮮の年長者たちは一千年子供の人格を抹殺し、自由を剥奪してきた歴史的大罪人であり、悪者である」と批判し、その原因は古い倫理道德の残滓、すなわち長幼の序だと断言した。そして、近年女性解放論が盛んなのに対して、児童解放論がいまだに広まっていけないのは残念だと、次のように締めくくっている。

子供もまた人間である。二千万兄弟の中の一人であり、将来朝鮮の運命を大きく開拓する人材の中の一人である。彼らの人格を認めるべきである。彼らと仲良くし、年長者と子供の間に新しい道を作らねばならない。このような精神を私たち大人一人一人が持つていけば、長幼の序の弊害による昨今の諸悪習は改められるであろう。半島の数百万の幼い男女は、恐ろしい因習の呪縛から解放されるだろう。今日女子解放論が盛んに行われているのに対して児童解放論が未だに広まっていけないのはいつたいなぜなのか¹³⁾。

儒教の呪縛から女性を解放すべきだという主張は、かなり早い時期からなされていた。一八八八年、開化派の旗手・朴泳孝が朝鮮ではじめて妾を持つことの禁止と「若い未亡人には再婚を認めよう¹⁴⁾」と言い出してから女性解放運動が次第に本格化し、一八九四年の甲午の改革の際には「早婚禁止」と「再婚の自由」が法律として定められるまでに至った¹⁵⁾。その後『学之光』

『青春』『開闢』などの雑誌で女性特集号が生まれ、また『女子界』『新女性』などといった女性雑誌が刊行されるなど、早い時期から女性の人権を守るためのさまざまな活動が行われていた。

ところが、女性以上に悲惨な状態に置かれていた子供に目が向けられるようになったのは、それよりもかなり遅くなってからである。これは何も韓国に限ったことではない。日本や中国でも女性解放の思想の普及に伴ってようやく児童への関心が高まったことはよく知られた事実である。孝を重んじる儒教文化圏では、子供はとりわけ見えにくい存在だったのかもしれない。

こうした儒教的人間観に変化の兆しが見えたのは、一九一〇年代半ばから一九二〇年代にかけて日本に留学していた知識人たちが帰国したことと関連が深い。日本に留学中、祖国をめぐる国際情勢に強い危機感を覚えた彼らは、帰国後、相変わらず儒教的世界観にどっぷり浸っている祖国に不安を覚え、にはいられなかった。そして、彼らは祖国の伝統的な意識、すなわち家族制度、早婚制度、男尊女卑、孝、長幼の序などを封建時代の悪しき遺産として批判し始めた²⁰。特に儒教制度の根幹ともいえるべき「孝」の概念については強い疑問を提示し、批判を行っている。

これら儒教批判の口火を切ったのは、日本留学帰りの知識人であった。彼らは日本に留学中、西洋からもたらされた新しい学問や思想、教養を学ぶことによって自分達の儒教的教養や世界観、倫理観が如何に個人の自由を束縛していたかに気づいた。彼らは早速個人の意思を無視する結婚制度や家族制度に対する批判を始めた。これは彼ら自身が封建的婚姻制度による被害を受けた当事者でもあるからだ。だが、中でも李光洙の儒教批判は他の追従を許さないほど激しいものだった。彼は一九一〇年に「今日の我が韓青年と情育」という論文を執筆し、父母への絶対的服従を説く儒教教育の矛盾と不条理を指摘し、個人の感情や情緒を重視する教育を行うべきだと主張した。児童文学者、李在轍氏は、「今日の我が韓青年と情育」は封建教育に反旗を翻した最初の論文であるばかりでなく、近代的児童観の形成に画期的な一歩をしるした最初の児童論であると評価している²¹。

この反伝統宣言に始まる李光洙の儒教批判は、「朝鮮家庭の改革」(一九一六)

を皮切りに、「早婚の悪習」(一九一六)、「婚姻に関する管見」(一九一七)、「婚姻論」(一九一七)などを経て「子女中心論」(一九一八)で最高峰に達する。

旧朝鮮の間違った道徳から新朝鮮の子女を救出することが焦眉の急であると同時にわが民族万年の運命の分岐点である。

まず、子女に独立した自由な個性を与えよ。彼らをして「私達は父祖の所有物だ!」という観念を捨てさせ、「私達は自分自身の所有物だ!」という観念を持たせよう。次に、子女としての最大の義務は自分自身と自分の子供に対してであり、決して父祖に対してではないという観念を持たせよ²²。

未だ儒教的・封建的な勢力が猛威を振るっていたこの時期に、「旧朝鮮の間違った道徳から新朝鮮の子女を救い出」せという訴えが、孝の国の儒者たちを震撼させたことは言うまでもない。また、これほど朝鮮社会を根本から揺るがす衝撃的な話題もなかっただろう。李光洙は「父祖の所有物」と見なされていた従来の児童観に対して真向から異論を申し立て、子供とは本来「独立した自由な個性」を持つはずものだと、全く新児童観を呈示した。彼のこうした児童観が、当時の知識人たちの絶対的な賛同を得、それがきっかけで子供の置かれている現状を見つめなおそうとする動きが沸き起こったのである。

四、子供の発見

韓国の近代文学における子供のイメージに変化の兆しが見えたのは、一九二〇年代である。崔南善や李光洙の作品に描かれた向上心あふれる「小さな大人」としての子供のイメージは、弱い純真なイメージに席を譲ることになる。その分岐点となったのが田榮澤の「白痴か天才か」である。

田榮澤は、日本で耽読していた独歩の作品の中でも、とりわけ「鹿狩」

（二八九八）「画の悲しみ」（一九〇二）「馬上の友」（一九〇三）「少年の悲哀」（一九〇二）「春の鳥」など、いわゆる「少年もの」と呼ばれる作品に大きな衝撃を受けた。これらの作品には韓国社会がタブー視していた子供が、美しく、生き生きとした姿で描かれていたからである。中でも、白痴の少年を主人公にし、そのような弱い子供は大人が保護し、教育せねばならないと主張する「春の鳥」に強く刺激されたのではなからうか。

一九一〇年代当時、韓国では多難な時代に国家と民族の将来を担う世代として、少年達に強い期待が寄せられていた。少年賛歌ともいうべき言辭が論壇を賑わし、作家、ジャーナリスト、あるいは教育関係者は、少年こそが政治的・経済的・道徳的・知識的に破産状態に陥った朝鮮を救ってくれる存在だと、少年たちに熱いまなざしを注いだ⁸⁸。しかし、それはあくまでも雑誌や評論においてのことであった。現実の子供達は依然として儒教的ヒエラルキーの末端の存在として悲惨な状態に置かれていたことはすでに前節で見てきたとおりである。この理想と現実の違いによりやく気づいた、その最初の作家が田榮澤である。既に第二節で見てきたように、田榮澤の描いた七星という少年は、雑誌『少年』（一九〇八）の表紙を飾るような向上心あふれる少年でもなく、国家の運命を背負わされた人物でもない。それはまさしく田榮澤の周りにいる、普通の子供である。次の文はそれを雄弁に物語っている。

遊び方も変わっています。目に見えるものは何でも壊して分解しておくのです。そのせいで叔父にはいつも殴られています。またある時は、何か結構良さそうなものを作ったりもします。この間はナイフで何かを切ったり削ったりしていたかと思うと、銃を作りました。結構銃らしきものができあがりまして。またある時なんかは揚水機を作るといって、昼夜それにつきつきりでした。他の子は皆勉強しているのにあの子だけが勉強もせず、あのようなつまらない遊びばかりしているのです。それで私はあまりにも腹が立って、それを隠してしまいました。すると、あれがなくなっただけに気づいたあの子は食事もせずに泣くばかりです。仕方がないので返しました。それから、また妙な癖がありました。四角

い箱やケースがあれば片っ端から集めて部屋の中に積んでおくのです。（二六頁）

ここには父祖への服従と礼儀を理想とする儒教的な児童観はどこもなく、少年期にありがちな遊びに夢中な子供の姿が生き生きと描かれている。大人の使い走りと思われていなかった少年を、ここまで臨場感あふれる筆致で描きあげたのは韓国文学史上はじめてのことであろう。つまり、田榮澤は大人とは明らかに異なる子供時代を見出していたのである。

フィリップ・アリエスはその著『子供の誕生』（一九六〇）の中で、西洋においては、「ほぼ十七世紀までの中世芸術では子供は認められていず、子供を描くことが認められなかった」。しかし、十七世紀になって、大人と異なる属性を持つ子供期の存在が意識され、子供期の発見がなされたと指摘している⁸⁹。当然そうした西欧の児童観が近代化とともに東アジア文化圏にも影響を及ぼした。ただ、日本が「明治五年の学制の頒布」を契機に早く近代的小児観を獲得していた⁹⁰のに対して、儒教的世界観が根深かった韓国や中国では子供の存在を強調することは依然としてタブーと見なされていた。だからこそ、魯迅や李光洙ら東アジアの新文化運動の旗手たちは儒教のヒエラルキーから子供を解放せよと主張したのである⁹¹。しかし、彼らが打ち出した少年像は、前途多難な祖国に期待される人間、すなわち「小さな大人」としての子供であって、無垢なる子供のイメージではなかった。この「小さな大人」のイメージから脱皮し、後の児童文学者が主張するような、大人と対比される子供時代を描いたのが、ほかならぬ田榮澤である。

しかし、全く新しい子供時代を描くことは決して容易なことではなく、七星が「春の鳥」の六歳をヒントにして造型された人物だということはすでに見てきた通りである。その「春の鳥」の六歳だが、実は本文中に独歩自身が「英国の有名な詩人の詩に『童なりけり』といふがあります」と、ワーズワースの詩に言及していることから想像がつくように、ワーズワースの影響の下に生まれた人物である。ここで注目すべきなのは、独歩がワーズワースの作品にヒントを得て子供の無垢を賛美する「春の鳥」という作品を執筆し、

その「春の鳥」を、今度は韓国の文学者が取り入れていたことである。ただし田榮澤は、白痴と少年を結びつけて無垢なイメージにつながる少年像を描くだけではなく、少年の周囲の村人の無知に着目した作品を執筆している。このような変容の背景には、子供たちを取り巻く劣悪な環境に対する作者の危機感があつたと思われる。

近代に入ると、子供は保護し、教育せねばならない「未熟な存在」として認識されるようになったが、一九一〇年代の韓国の子供たちには未だに厳しい儒教倫理が強いられていた。そうした状態から子供たちを救い出し、近代的な児童観に基づいた教育を施そうとする動きが都市部を中心に展開されるようになった⁽²⁶⁾が、それはあくまでも少数の知識人の間のことであつて、大多数の民衆には浸透していなかった。

七星がいなくなる前日、ある学生の時計がなくなりました。私は一人ずつ学生を呼びだして彼らの体を検査しました。すると、七星の体からその時計が出てきました。時計はすでにめちやくちやに壊れていました。私は七星の癖を知りつつも、以前私の万年筆を壊された事や今までの努力が無駄になったのが悔しくて、七星を思い切り殴りました。しかし、七星は何も人のものがほしくて盗んだわけではありません。チクタクチクタク動く時計が不思議で、その仕組みを見たくて盗んだのです。

七星には自分のものと他人のものとの区別がありませんでした。友達が持つている時計も道端にある木の皮も彼にとつては同じものでした。彼は少しでも変わったものがあれば、それをとことん見ないと気が済まない熱心さを持っていました。私の万年筆を壊したのもそれでした。私はそれを妨害しました。私だけではなく、七星の周りにいる人は皆七星のやることを妨害しました。そんな村を七星は去りました。(三十頁)

これは七星がなぜ家出をしたのかについて語ったことである。語り手の△私△によれば、七星は変わった子供である。母親をはじめとして村人には時々理解しかねる行動、すなわち友達の時計や先生の万年筆を勝手に持ち出

して分解したり、四角い箱など変わったものに異常に執着したりする。だが、七星は決して変わったことをしているわけではない。成長期の子供なら誰もが一度や二度は好奇心にかられてやる遊びをしているだけなのである。しかし、七星の母や村人たちはそのような子供時代への認識がないために、七星の燃えるような好奇心や探究心には全く関心を示さず、奇怪な行動をするといつて暴力を振るつたあげくに七星を死に追いやってしまうのである。これが当時の韓国社会の現実であつた。こうした現実から逃れて「思いっきり壊してみたり、思うままに作ってみたり、そして可愛い箱を沢山集め」たいという幼い七星の夢は、必然的に死を意味していた。

七星は冷たい風が吹く冬、雪の降り積もった柳の木の下に蹲つて両手を摺り合わせ、フーフーと息を手に吹きかけながら、ぶるぶる震えて死んでいった。その姿を見届けたのは、寝ないでキラキラと輝く空の星達だけでした。

哀れな七星は今頃、邪魔するお母さんも、殴る叔父や先生も、そしてからかう仲間達もいないところ―あの雲の上、星の上に上つて思い切りしたいことをしながら気楽に過ごしているのではないだろうかと思ひます。(三十頁)

七星の死を悼む△私△の想いは、「春の鳥」の六歳の死を悼む△私△の想いとよく似ている。だが、両者の間には決定的な違いがある。それは七星が「ぶるぶる震えて死んでいった」という死の描写である。七星の死は「春の鳥」やワーズワースの作品のように純真な少年の自然への回帰ではない。頑迷な村落社会が彼を殺したのである。実際に評論では少年は賛美され、理想化されていても、現実の子供達は七星のように悲惨な状態に置かれていた。

それを大人たちが意識するようになったのである。田榮澤が七星を凍死させたのは、この理想と現実の差を認識していたからにはかならない。彼のこの現実認識こそが韓国における子供の発見を促し、方定煥(一八九九―一九三二)の児童運動⁽²⁷⁾へと受け継がれていったことはもつと評価されてしかるべきで

あろう。

五、他者を写し取る一人称叙述形式

韓国の近代小説史上初めて子供を主題に取りあげた作家は李光洙であるが、彼の描いた「子供像」は、今日我々がイメージするものとはずいぶんかけ離れていたことは注目に値する。例えば「少年の悲哀」（一九一七）の主人公、文浩は十八才の青年でありながら自分のことを少年と称している。「幼き友へ」（一九一七）の主人公は、本国に妻を残したまま外国を彷徨う青年である。その他「彷徨」（一九一八）「尹光浩」（一九一八）等の主人公もすべて少年というよりも青年に近い人物である。つまり、李光洙にとっての子供とは妻子のいる、髭を生やした、いわば「小さな大人」なのである。これらの「小さな大人」たちは当然のことながら前途多難たる祖国に期待される人間、つまり大人となるべき少年であつて、十九世紀のロマン主義者たちが主張するような無垢なる存在としての子供像ではない。

ところが、同じ頃執筆された李光洙の「子女中心論」（一九一七）や「朝鮮家庭の改革」（一九一七）などの一連の評論を見ると、彼は少なくとも大人と異なる子供の特性を認識していたことがわかる。このような小説と評論の差はどのようにして生じたのだろうか。柄谷行人はその著『日本近代文学の起源』（講談社、一九八〇）の中で、「子供が『子供』として扱われるようになったのはきわめて近年のことであり、「児童」は、「風景」や「内面」と同様、近代になって発見されたものであり、児童が見出されるためには、「まず『文学』が見いだされねばならぬ」という斬新な指摘を行っている⁽⁸⁾。柄谷行人の説によれば、「子女中心論」を書いた頃の李光洙は、子供期というものを認識していたと思う。しかしながら、時代的制約と彼の実践力の限界などによって評論で主張した内容とそれを写す形式との間に乖離が生じてしまったのである。これは啓蒙文学者として名高い李光洙の悲劇といわざるを得ない。この理論（現実認識）と実践（表現の問題）の二重性ないし乖離は、近代文学が成立していく過程で次第に克服されていくが、その最初の作

品がほかならぬ田榮澤の「白痴か天才か」であつた。

田榮澤が留学先の東京で仲間五人と新しい文学運動を展開しはじめたのは李光洙らの「啓蒙小説」の全盛期だつた。啓蒙や教化の理念を盛り込んだだけの旧態依然とした小説から脱皮するために田榮澤らがまず行つたのは、それまで韓国文学には完全な形では登場することのなかった一人称観察者叙述形式や枠組形式、日記体などといった一人称形式を導入することだつた。この試みは成功し、一九〇〇年代から模索を続けてきた韓国の近代文学はようやく現実社会に生きる人間と彼らの人生問題や時代状況を書き写すことができたのである。つまり、一人称小説へのこだわりが、韓国の文学にリアリズムを導入することになったのであるが、田榮澤の「白痴か天才か」はその最初を記念すべき一人称小説である。以後一九二五年までの約六年間の間に六十編を上回る一人称小説が執筆されるなど、一人称形式は一九二〇年代を代表する叙述様式の一つとなつた⁽⁹⁾が、その背景には近代化の過程で植民地に転落した韓国の現実が挙げられる。

日韓併合に始まつた日本の朝鮮支配は、朝鮮の人たちに日本に対する抵抗意識を植え付けるとともに、日本との力の差を強く自覚させた。社会をリードする知識人達は国権を回復するために全国各地で大小の反日運動を展開する一方、「教育救国運動」をはじめとする様々な啓蒙運動を展開し、近代国家の建設に全力を尽くした。しかし、日増しに厳しくなる植民地政策の前で近代化への夢は頓挫し、民衆の大多数、とりわけ社会的弱者である子供や女性、下層民達は近代化とは無縁の生活を強いられた。

このような現実には危機感を覚えた評論家達は、いち早く雑誌や新聞などで子供や女性、貧困者などいわゆる社会的弱者の救済を訴える論文を執筆し、彼らへの関心を促した。しかし、小説家達は相変わらず興味本位の恋愛ばかりを主題に取りあげていた。だから留学中の日本で自然主義やリアリズム、写実主義といった社会の現実をありのままに写し取る新しい文学に接していた田榮澤が、社会的弱者の現実に関心を示し、それを題材にして作品を執筆しはじめたのは当然のことであろう。その際、田榮澤が用いた形式は一人称形式の中でも、副人物が登場して主人公を観察し、それを語る形式だつた。

このような形式を用いることでそれまで韓国社会が長い間見落としてきた人々たちを発見し、彼らの人生を浮き彫りにすることができたわけだが、「白痴か天才か」の七星という白痴の少年はその最初の「新しい人間」なのである。つまり、田榮澤は韓国近代文学史上はじめて「子供」と「白痴」を発見した人物なのだが、この「新しい人間」の発見に独歩の一人称小説「春の鳥」が与えた影響は計り知れない。

註

- (1) 田榮澤「『創造』と『朝鮮文壇』と私」(『現代文学』一九五五年二月) 七九頁。
- (2) 蔡薫「外来思潮の導入とその土着化過程」(『一九二〇年代韓国作家研究』一九七六／一九八二年) 十四頁。
- (3) 一九一〇年代、日本に留学中の留学生達が独歩の作品を読んでいたという事実を証明するものとして、『創造』(一九一九年二月、東京)と『現代日本小説集』(一九二三年六月、上海)をあげることができる。前者は、田榮澤ら韓国の留学生達が東京で創刊した文芸雑誌であるが、創刊号に独歩を日本の自然主義の先駆者として紹介している。後者は周作人ら中国の留学生たちが中国に帰国して出した日本文学の翻訳集であるが、その中に独歩の小説「少年の悲哀」と「巡査」が翻訳されている。これらの事実からもわかるように、独歩は韓国や中国の留学生達の間で広く知られ、かつ読まれていた作家である。
- (4) 金容穆「『海より少年へ』の理解」(『崔南善と李光洙の文学』セムン社、一九八一年) 三二～三五頁。
- (5) 拙稿「愚者文学としての『春の鳥』」(『比較文学』第四五巻、日本比較文学会、二〇〇三年三月)。
- (6) 小山内薫「故独歩の作物について」(『国木田独歩』日本図書センター、一九九〇年、初出は月刊文芸誌『新潮』特別号国木田独歩追悼号(一九〇八年七月) 六五頁。
- (7) ・滝藤満義「国木田独歩の魅力」(『国文学解釈と鑑賞・特集国木田独歩

の世界』一九九一年二月) 一三頁。

・後藤康二「近代小説における一人称の語り手へ自分」(『会津短期大学学報』第四五号、一九八八年)。

- (8) 拙稿、「恋愛、手紙、そして書簡体という叙述様式(上・下)」国木田独歩「おとづれ」と李光洙「幼き友へ」(『宇都宮大学国際学部研究論集』十二、十三号、二〇〇一年十月、二〇〇二年三月)。
- (9) 拙稿、「媒介者としての日本文学」国木田独歩「運命論者」を手がかりとして(『第二十七回国際日本文学研究会議録』二〇〇四年三月)。
- (10) 拙稿、前掲載註(5)に同じ。
- (11) 趙鎮基(『韓国近代リアリズム小説の叙述様式と作家意識』(『韓国近代リアリズム小説研究』セムン社、一九八九年)、崔柄宇「韓国近代一人称小説変移様相」(『韓国近代一人称小説研究』ソウル大学大学院博士学位論文、一九九二年)らによれば、一九二〇年代を通じて執筆された一人称観察者叙述形式小説は次のようなものがある。
- 田榮澤「白痴か天才か」(『創造』一九一九)
- 羅稻香「電車車掌の日記何篇」(『開闢』一九二四)
- 蔡萬植「三つの路へ」(『朝鮮文壇』一九二四)
- 李淳英「日曜日」(『朝鮮文壇』一九二四)
- 金東仁「遺書」(『霊台』一九二四年九月～一九二五年一月)
- 田榮澤「ファスブン」(『朝鮮文壇』一九二五)
- 廉想涉「検査局待合室」(『開闢』一九二五)
- 蔡萬植「親不孝息子」(『朝鮮文壇』一九二五)
- 玄鎮健「私立精神病院長」(『開闢』一九二六)
- 田榮澤「スンボギの便り」(『朝鮮文壇』一九二六)
- 廉想涉「飯」(『朝鮮文壇』一九二七)
- 金東仁「娘の業を継ぐために」(『朝鮮文壇』一九二七)
- (12) 李在銑「叙述者の役割と叙述類型」(『韓国短編小説研究』一潮閣、一九七五年) 八四頁。
- (13) 李在銑「愚者文学論」(『韓国文学主題論』西江大学校出版部、一九八九

年)

- (14) 金松峴「白痴か天才かの源泉探索」(『現代文学』百号、一九六三年四月)。
 蔡薰、「一九二〇年代初期登壇作家と作家意識の変転相」(『一九二〇年代韓国作家研究』一九七二年)、宋河春(『一九二〇年代韓国小説研究』

高麗大学民族文化研究所、一九八五年)、金充植「『創造』の世界2」(『金東仁研究』民音社、一九八七年)、趙鎮基「田榮澤の初期小説と現実認識」(『韓国現代小説研究』学文社、一九九一年)、張伯逸「韓国リ

アリズム文学之生成過程と批評」(『韓国リアリズム文学論』探求堂、一九九五)などは、田榮澤の「白痴か天才か」に及ぼした独歩の影響について触れているが、いずれも金松峴氏の指摘を敷衍するにとどまっている。

- (16) 拙稿「啓蒙と無垢の間で―韓国近代文学における子供」(『朝鮮文学論叢』白帝社、二〇〇二年)。

- (17) 田榮澤「白痴か天才か」(『創造』二号、一九一九年三月) 以下頁のみ記入。
 (18) 国木田独歩「春の鳥」(『定本国木田独歩全集十巻別巻』学習研究社、一九九六年) 以下頁のみ記入。

- (19) 崔柄宇「韓国近代一人称小説変移様相」(『韓国近代一人称小説研究』ソウル大学大学院博士学位論文、一九九二年) 三五頁。

- (20) 『開闢』(一九二〇年〜一九三七年、ソウル) 第二号から十号に掲載された評論のうち、子供の問題を取り上げたもののほとんどが、子供への暴言と暴力の禁止を強く主張している。

「長幼の序の弊害―幼年男女の解放を提唱す」二号

「家族制度の側面観」三号

「従来の孝道を批判して―今後の父子関係を提言する」四号

「世界と共存する為に教育問題を再考す―まずは書堂を改良を絶句する」五号

「幼年教育策如何に」十号

- (21) 李相天「新道徳論」(『学之光』東京、学之光社、一九一五)。

- (22) 金小春「長幼の序の弊害―幼年男女の解放を提唱す」(『開闢』第二号、

ソウル、開闢社、一九二〇年七月) 五八頁。

- (23) 朴泳孝は、一八八八年の正月に、亡命先日本から朝鮮国王に、国政改革について論じた「建白書」を執筆しているが、その中で女性への差別をなくすことを提案している。

「臣はなお、人民をして通義を得せしむために、幾つかのことについて述べなければなりません。一つには、男女、夫婦は、その権を均しくすべきだということです。およそ男女の嫉妬心は同じです。しかるに男は妻があるのに妾を娶り、あるいは妻を疎んじて追い出す。処が女史は再婚することも、離婚することもできないのです。法律では女史の姦淫だけを禁じながら、男子の乱交は禁じていません。かつ男は妻が亡くなれば再び娶ることができるのに、女は夫が亡くなると、まだ夫婦の契りが結ばれていなくても、再婚することができないのです。家族親族が制止するからです」姜在彦『朝鮮の歴史と文化』(明石書店、一九九六年) 一七五頁より再録。

- (24) 甲午改革とは、一八八四年七月から一八九六年二月に至るまで行われた一連の改革を甲午改革といい、少なくとも制度上ではこの改革によって、封建的な旧体制が解体され、近代的な諸制度が実施された。政事の面では、宮内府と行政府とを分離して行政府の管制改革を行ったこと、官吏登用においても、儒教による科挙制度を廃止して普通試験及び特別試験制で両班、常民の別なく人材を登用したこと、行政権から司法権を分離して罪人連座制を禁止したことなどを実施した。また経済の面でも、度支部(大蔵省)による財政の一元化と予算の編成、銀本位制度による通貨制度の整備、租税の金納化が行われた。社会制度の面でも、奴婢法の廃止と人身売買の禁止、早婚の禁止と女性の再婚の自由、及び封建的身分制の廃止などが行われ、従来の儒教教育に代わる新しい内容の近代的学校制度が実施された。姜在彦『朝鮮の歴史と文化』(明石書店、一九九六年) 二五〇〜五一頁より再録。

- (25) 一九一〇年代から一九二〇年代にかけて国内外で出版された雑誌の主な特徴は、いわゆる旧道徳・旧思想への批判的な記事が多く掲載されている

ることだ。その主なものを列举すると、次のようなものがある。

李相天「新道徳論」(『学之光』一九一五)

姜女子「女子界にも自由が来た」(『学之光』一九一五)

金燦洙「新衝突と新打破」(『学之光』一九一五)

李光洙「朝鮮過程の改革」(『毎日新報』一九一六)

李光洙「早婚の悪習」(『毎日新報』一九一六)

田榮澤「家族制度を改革せよ」(『女子界』一九一七)

朴勝轍「我々の家庭にある新旧思想の衝突」(『学之光』一九一七)

李光洙「婚姻に関する管見」(『学之光』一九一七)

李光洙「子女中心論」(『青春』一九一八)

李エレナ「女子教育の思想」(『女子界』一九一八)

田榮澤「旧習の破壊と新道徳の建設」(『学之光』一九一八)

柱麟常「古い殻を捨てよう!」(『学之光』一九一九)

金小春「長幼の序の弊害」-幼年男女の解放を提唱す(『開闢』一九二〇)

崔承萬「女子解放問題」(『女子界』一九二〇)

妙香山「従来の孝道を批判-今後の父子関係を宣言する」(『開闢』一九二〇)

滄海居士「家族制度の側面観」(『開闢』一九二〇)

李敦化「新朝鮮の建設と児童問題」(『開闢』一九二一)

李在轍「児童文化運動時代」(『韓国現代児童文学史』ソウル、一志社、一九八七年)五九、六一頁。

李光洙「子女中心論」(『李光洙全集』ソウル、三中堂、一九六四)四二、四三頁。

崔南善の「少年の国」宣言を機に、長い間無視されてきた少年達への関心が高まり、雑誌、評論、詩、小説などは一斉に少年を取り上げた。以下はその主なものである。

雑誌…『少年』一九〇八、『赤いチョゴリ』一九一二、『子供の見る本』

一九一三、『新しい星』一九一三、『青春』一九一四

詩…『海より少年へ』一九〇八、『新大韓少年』一九〇九

唱歌…『少年大韓』一九〇八、『我々の運動場』一九〇九、『大韓の少年行』一九〇九、『海上の勇少年』一九〇九、『少年の夏』一九一〇

時調…『快少年世界周遊時報』一九一〇

小説…『幼き犠牲』一九一〇、『幼き友へ』一九一七、『少年の悲哀』一九一七、『白痴か天才か』一九一九

評論…『今日我韓青年と情育』一九一〇、『今日我韓青年の境遇』一九一〇、『子女中心論』一九一八、『少年へ』一九二一

P・アリエス著、杉山光信・杉山恵美子訳『八子供』の誕生(みすず書房、一九八〇)。

河原和枝「近代日本におけるへこどもVのイメージ」-『赤い鳥』を中心に(『ソシオロジ』一一〇、一九九一年二月)。

李光洙が「子女中心論」(一九一八)という論文の中で儒教的ヒエラルキーから子供を救えと訴えた翌年、魯迅も「我々は今日どのように父親となるか」(一九一九)という論文の中で、子供たちを解放してやろうではないかと主張している。

一九一〇年代当時韓国では一部の大都市を除く、ほとんどの地域が未だに教育的に無知で、貧しい環境の下におかれていた。大多数の人々は劣悪な環境から脱することもできずに、そこに安住するしかなかった。このような現実から脱するために知識人たちは人材育成など、いわゆる教育運動を大々的に展開した。

方定煥は、それまで子供をさす用語を「アヘ(児孩)」という卑称から「オリニ(子供)」という新しい言葉に変え、さらに児童文学雑誌『オリニ』(一九二三〜一九三四)を創刊して韓国における近代的な児童観の普及に多大な影響を及ぼしている。

柄谷行人「児童の発見」(『日本近代文学の起源』講談社、一九八一年)崔柄宇、前掲載註(ii)。

(35) (34) (33) (32) (31) (30) (29)

(二〇〇四年十一月一日受理)

요지

일인칭 서술형식과 「새로운 인간」의 발견
— 구니키다 돗보 「하루노 도리」와 전영택 「천치? 천재?」 —

정 귀련

구니키다 돗보는 60여편의 전 작품중 중요작품의 대부분을 서간체를 비롯한 일기체, 고백체, 담화체, 회상체, 연설체, 수기체 등 일인칭 서술형식으로 집필할 정도로 일인칭 서술형식을 즐겨 사용하였다. 그래서 오사나이 가오르로부터 「일인칭소설의 개조」로 평가받았지만 물론 일본에 있어서의 일인칭 서술형식은 돗보가 새로 만들어 낸 것이 아니라 후타바테 시메이가 번역한 쓰르게네프의 작품에서 배운 것이다. 그것을 돗보가 일본 문단에 정착시킨 것은 잘 알려진 사실이다. 문제는 돗보가 일본문단에 정착시킨 이 일인칭 서술형식이 국경을 넘어 한국문단에도 큰 영향을 미쳤다는 점이다. 한국최초의 근대 서간체소설 「어린벚에게」(1917)와 액자소설 「배따라기」(1921), 일인칭관찰자 서술형식소설 「천치? 천재?」(1919)는 모두 돗보의 서간체소설 「오토즈레」와 액자소설 「여난」·「운명론자」, 일인칭관찰자 서술형식소설 「하루노 도리」의 영향을 받았다. 이 사실은 한국근대문학의 기원을 고찰하는 데 있어서 아주 중요한 문제이다. 특히 일인칭 관찰자 서술형식은 한국의 전통 유교사회가 오랫동안 무시하고 간과해 왔던 어린이와 여자를 발견하는데 결정적인 기여를 했다.

일인칭관찰자 서술형식은 <나>라는 화자가 체험한 것, 본 것, 들은 것을 고백하는 점에 있어서는 일인칭소설이지만, <내>가 고백하는 이야기는 자기자신의 이야기가 아니라 타자의 사건이나 경험, 인생이다. 다시 말하자면 <나>는 어디까지나 제 삼자의 입장에 서서 타자의 인생을 관찰하고 그것을 말하는 형식이다. 문제는 이 형식이 한국문학에는 전혀 존재하지 않았던 완전히 새로운 서술형식이었다는 점이다. 그것이 전영택의 「천치? 천재?」의 출현으로 갑자기 주목받기 시작하여 1920년대에는 일인칭관찰자 서술형식으로 집필된 주요작품이 12편을 넘는 등 일인칭관찰자 서술형식은 한국사회의 현실을그려내는 새로운 서술형식으로서 작가들의 주목을 받기 시작했다. 돗보의 「하루노 도리」는 그 계기를 만든 작품이다.

본고에서는 구니키다돗보의 「하루노 도리」를 중심으로 한국근대문학사상 처음 등장한 일인칭 관찰자 서술형식이 한국문단에 수용된 배경과 한국문학에 끼친 영향에 관해서 논했다.